

## 日本人の生物人類学者にとって、「人種」とは何なのか？

片山 一 道

### はじめに

日本人の人類学者、ことに自然人類学もしくは生物人類学を標榜する者にとって、「人種」あるいは「人種概念」の歴史とは、あまり知りたくもないし、さほど触れたくもないことのようなものである。さまざま理由で、できたら語りたくもないことのようなのである。それになにより、過去のものとして、そっとしておきたい気分を強く抱かせることのようなのである。おそらく、「人種とはなにか」などと訊かれれば、一瞬、ためらいのようなものを感じるのではなからうか。ともかく、下手に口にすれば、踏み板を踏み外すようなことにもなりかねないと危惧しているかに思える状況である。

ただし、「人種」という用語、「人種概念」に対する問題意識、その歴史へのまなざしは遠くになりけり。まさにそれが二一世紀を迎えた日本の自然人類学者の心境なのではないだろうか。たしかに、今から二〇年あまり前までは学術論文や専門書（たとえば、人類学講座編纂委員会編 一九七七）の類にも、けっこう「人種」は登場していた。それが最近は、ものの見事、その用語を目にする機会がなくなつた。いちばん目新しいのでは、自然史学会連合のHPで山口敏氏が「人種」とは虚構か」という論考をものしている程度だろう。

いずれにしても私も含めて、今の日本の自然人類学者で「人種とはなにか」に気の利いた答えを用意できる人は珍しかろう。上述した山口敏氏にしても、「人種の変異」のことを問題にしているにすぎない。その点では、「人種差別」や「人種偏見」などの問題を研究する文化人類学者のほうが自信に満ちた解答を用意してくれるだろうし、レトリックとして使うことに慣れた一般市民のほうが気後れせずに答えてくれるだろう。

自然人類学者が「人種」に距離をおくのは、なにも臆病だからではない。要するに、言語明瞭、意味明瞭すぎる言葉だからなのだろう。説明概念としては、はなはだ心もとない。たとえば、「イギリス人と日本人では鼻骨の大きさが平均して異なり」、その理由として「人種が違うためだろう」と言つて、どんな意味があるのか。それに相互理解もあぶない。たとえば私が専門とするオセアニア地域での例だが、誰かが「メラネシア人種」などと記述したとしよう。もちろん私自身は、なんのことか理解できない。たぶん多くの人も事情は同じだろうから、ただ混乱を招くだけである。だから学術用語としては、とても使用に耐えない。問題外なのである。

ともかく自然人類学者、あるいは生物人類学者にとって、もはや学術用語としての「人種」は遠くなりけり、なのだ。まさに「さわらぬ神にたたりなし」、そんな状況が蔓延する今日この頃、どうして、かつて「人種学」などという分野が存在していたのか、あるいは存在するように錯覚していたのか、そこところが、実はよくわからない。それが実情なのだ。

しかし日本語の中では、「人種」という言葉は、むしろ日常的に耳にするし目にもする。たぶんにきどつた言い方なのだろうが、「政治家という人種」、「テレビタレントという人種」、「もの書きという人種」、「人類学者という人種」などのごとくである。こうした流儀が日本語のなかで定着しているのは間違ひなからう。私自身は、それに目くじらを立てる気持ちは、さらさらない。しばしば、「人種」という言葉の使い方に気をつけよう」とか「人種と民族を混同してはいけない」などという高みに立つたような言説に出会ふが、そんなものに与する気持ちは毛頭ないのである。

## されど、「人種」の亡霊は今も

ともかく、この二〇年くらいのあいだに、日本の生物人類学者のあいだで「人種学」は死語となり、あえて「人種とは何か」などと大上段に構える者がいなくなった。本論では、今日の日本の生物人類学者が「人種」に冷淡となった理由やプロセスを概観してみる。

「人種学」もしくは「人種」という用語は消えつつあるが、しかしそれと同時に、それらで表そうとしてきた概念のようなものは、いまだ健在である。つまり人間という動物を類型的に細分化しようとするレッテル貼りの思惑なり、そうした概念を利用して、ことさらに人間の多様性を単純化していこうとする方法論は、いまなお衰えを知らないのである。「それは人種の違いです」とか、「何々人種と何々人種が混血した」とかと、あからさまにやらないから、むしろ人種概念は潜在化したと言ってよいのではなからうか。この日本の生物人類学者の多くが抱く性癖、つまり「人種」は虚構だと言い、されど「人種学」的レッテルを弄する二重構造となった現実について論究してみる。

その手の「人種学」的なレッテル貼りには枚挙にいとまがない。たとえば、「弥生系渡来人」対「縄文系先住人」、「渡来系弥生人」対「縄文系弥生人」対「混血弥生人」、「新モンゴロイド」対「古モンゴロイド」、「スンダドント系」対「シノドント系」などなど、だ。こうした二分論ないし三分論が日本人の人類学者は好きなようであり、そうした思考回路はたぶんに、かつて存在した「人種学」などの遺産なのかもしれない。つまり、どこかである時代の人骨が見つければ、それを二分論か三分論の枠組みのなかで、いずれかのタイプに属するか判定することで結論とするわけだから、まさに「人種学」の思考様式そのものなのである。実にトリッキーであり、いったい何の研究なのか、気にならないのだろうか。

## 日本人類学における「人種」の歴史

日本語の「人種」という言葉は、いつの頃に生まれ、どのようにして日本語に組みこまれたのか。それについて簡単に答えるのは難しからう。坂野（二〇〇〇）によると、今から一〇〇年以上も前の明治時代の初期、つまり日本人類学会が創設された頃、この言葉は学術的な用語として使用され始めたのだが、当時の人類学で使われる「人種」は英語の「Race」とは、まったく似て非なる意味であった。いずれにしても非常に意味あいが曖昧であり、ひとつの概念というよりも、たんなる言葉にすぎない。そんなところがあった。たとえ同じ人物が書いたものでも前後の文脈により、さまざまな意味がこめられた。たとえば、あるときは「人間のグループ」であり、「地域を同じくする人びと」であり、「民族」であったが、またあるときは、西欧流の Race の意味で用いられたわけである。要するに、その当時の欧米社会で常套だった Race とは意味を異にして使われる場合が多かった。それにポジティブでもなく、ネガティブでもなく、どちらかと言えば正負の価値観がともなわない「人間のグループ」に近い用語なのであった。その頃、「人種学」なる分野も芽生えたのであるが、それも、むしろ「民族誌学」や「民族学」に対応して生まれたのであって、西欧流の「人種分類学」とはニュアンスを異にしていた。

このように日本人類学会が誕生した頃の日本語における「人種」という言葉は、人類学や歴史学における用語の体裁はなさず、むしろ「ある人間のグループ」という意味あいの一一般語の性格を有していた。そうした状況は、明治時代の後半に民族主義的な機運が台頭するまで続いた。しかし人類学における「人種」のコンセプトは急速に変化していった。それは一八九〇年代である。その頃から、「人種」は西欧流の Race に近くなり、人間を類型的に区別する用語として使われるようになったのである。やがて頻繁に使われるようになり、人類学者を中心にして、たとえば「日本人種」、「大和人種」、「アイヌ人種」、「石器時代人種」、「中国人種」、「白人種」、「黒人種」など、さまざまな用語が使われ始めた。まさにその頃、このような「人種」概念は、日本人の民族意識や帰属意識を高揚するため

に、あるいは周辺民族や西欧人などのあいだの相違を明確にしようとする意図において中心的な役割を果たしたようだ。それは、竹沢(二〇〇三)が指摘するように、日本の国家主義形成とも無関係ではなかった。

かくして、人類学会における「人種」概念は次第に変容をきたした。そうして変容した「人種」概念であるが、依然として、曖昧模糊とした点では依然として変わりがなく、とてもうまく定義されたなどとは言いがたい代物であり、むしろ以前よりも学術用語としての性格が弱まった感が強い。ひとつの概念というよりも、たんなるレッテルとしての意味あいが増し、気まぐれに用いられる傾向は、いっそう強まった。その当時、たいいていの人類学者は、「日本人種の起源」、「日本人種と近隣の人種との系譜関係」、「アジア人種の系統関係の解明」などと称する研究テーマに血道をあげた。いくぶん銜いをこめて、これでもかこれでもかと言わんばかりの細かさで頭蓋骨計測と生体計測、それに基づく統計分析の研究に邁進していったのである。ちなみに、かかるマニアックなほどの頭蓋骨計測研究の手法は一九〇一年に始まったカール・ピアソン(K Pearson 1901)らのバイオメトリカ学派に範をとったものにまちがいはなからう。そこではまず、ある人間の集団(過去の集団であれ、現在の集団であれ、ともかく時空を超えたかたちで)に人種のレッテルを貼る。はじめに「人種」ありきなのである。それから、それぞれの「人種」につき頭蓋骨や生体をマニアックなほどに計測して、平均値などを求め、統計分析を施す。そして、各集団間で系譜関係なり近遠関係なりを論じるのである。おのずから類型論的な問題設定となり、循環論的な結論に帰結するわけである。ただ数字だけが万能となり、レトリックとトリックのはざままで行き来するから、一見、科学的な体裁となる。まさに次のケルヴィン卿の格言のごとである。

「汝が語ろうとするものを測ることができ、それを数字で表せるなら、そのことについて汝はなにかを知ることができるが、もし数字で表現できないとしたら、汝の知識は貧弱で満足のいかないものでしかなかるう」(Kuhn 1977)

いずれにせよ、そもそも日本の人類学、あるいは日本の風土に入ってきた人種という言葉は、かならずしも西欧諸国やアメリカで一世を風靡していたRaceのコピーとしてではなかった。そのため、最初から曖昧をきわめたのだ。くわえて、当時の日本の風土にはRace概念を取り入れる必然性もなかったのである。実際、アイヌや沖繩の人びと

のことを正面から論じる人間は少なく、一九世紀の終わりになるまでは、民族主義や国家主義の立場を鮮明にする風潮も希薄であった。まさにそれらが台頭せんとした頃になってはじめて、西欧流の Race 概念を必要とする世の中が生まれたのである。だから、それ以前の「人種」が曖昧模糊としており、その言葉を用いる人により、あるいは徐々に意味あいを異にしていっていったとして、なんら不思議ではない。

## 第二次世界大戦後の転回

そんな状況が激しく転回したのが、第二次世界大戦の敗戦後、数年のことであった。当時、日本の人類学関係者のあいだでは、人種という言葉に対する懸念のムードが生じた。もっと正確に定義していこう、生物学的な用語としてのみ厳密に使用していこうとする機運が生じてきたのである。奇しくも、ユネスコにより一九五〇年「人種に関する声明」、一九五一年に「人種と人種差の本質に関する声明」が発表された時期と一致する。というよりも、それらの動向に触発されたのである。実際、人類学や民族学に関係した教科書や紹介書の類には、みだりに人種という言葉の使用することなく、純粹に生物学的な意味でのみ制約して用いようと強調する記述が、やたらと多くなる。このとき初めて、すくなくとも人類学の学会周辺では、いわゆる「人種」が英語の *race* と同義的に使われるようになり、ともにユネスコ声明で指摘された意味あいに収斂されるようになる。しかし現実には、一般社会で多用される人種という言葉普通名詞が様変わりしたわけではない。あいもかわらず、明治のはじめか、それ以前に輸入されたときの状態、つまりは非常に曖昧な概念でありつづけたのである。要するに、「政治家という人種」とか、「学者という人種」とか、「商売人という人種」などなど、ある種の人たちを十把一絡げに表現する言葉、いささか嘲りの調子を帯びた言葉としてあり続けた。その状況は今なお変わらないのだが。

かくかくしかじか、人類学の専門書にはほとんど例外なく、いささかステレオタイプな次のような「人種」もししくは「人種概念」に関する記述が溢れることになる。その嚆矢となるような表現の骨子をあげておこう。

「人種とはユネスコ声明で規定される *Race* と同義である〔……〕文化的伝統を共通する人間の集団である民族、言語を同じくする語族、あるいは国民などと混同してはならない〔……〕」 遺伝される一連の身体的形質において、その組合せや頻度が他と異なるような人類の集団である」（たとえば、田辺と山口 一九六一）

これと双子の関係にあるような人種に関する記述が、一九八〇年の頃までに出版された日本の人類学の成書にはどこかかない。たとえば、須田（一九六三）、寺田（一九六七）、寺田（一九七七）、香原（一九七五）、祖父江（一九七九）、田辺と富田（一九七七）等々である。もちろん、ときにその手の記述は一九九〇年代になっても一部の出版物に現れた。しかしながら、人類学者が人種という用語について厳格な意味で使用するよう喚起したときは、時すでに遅し。そんなところであった。長いあいだ、まったくもって野放図な使い方をされてきたものだから、それに一般社会で普通名詞として多用されてきたものだから、人類学の業界用語としても、一時的に何かを訴えたほどの効果しかなかった。

### なお幽霊のごとく彷徨える「人種」概念

たしかに人種とは生物学的な概念であり、また遺伝学的な概念でもある。その点では一九六〇年以降の人類学者の正鵠をえたものといえよう。それでもなお、日本語のなかに「人種」が輸入され借用されて以来、一〇〇年を経た時点では遅すぎた。それに曖昧な類型学的な概念として使われてきた歴史が長すぎたといえよう。いくら人類学者が「人種」概念について啓蒙しようとしても、いくらも変わるまい。日本語の「人種」は、世間では今なお、さまざまの意味あい使われ続けているのが実情である。実際には、人類学者のなかでもそうなのである。もちろんのこと、この言葉に悪意がこめられているわけではなからう。よこしまな想像力にかきたてられて使われるわけでもなからう。たいていの「人種」使用者は、その同義語たる西欧やアメリカの *Race* 概念がいかに悪名高きものだったか、よくは知らないし、それを知らうとはしない。だから、彼らに対して、あるいは「人種」概念に対して、目くじらをたてる必要性もないわけである。

日本の一般社会で人種という言葉が、どのような意味あいで使われるかはさておいて、人類学者のあいだでは、それが生物学的な用語であり、さらに遺伝学的な用語であることには暗黙の了解がある。しかし同時に、言うはやすく実体としてつかむが難しい概念である。それに一九世紀から二〇世紀前半にかけての悪名がつきまとうから、下手に使用すると誤解を招きやすい。そんな理由で、人種概念うんぬんを論じること尻ごみするし、いささか臆病にもなる。だから実際には、現在の人類学者は人種概念どころか、そもそも人種という言葉を避ける傾向にある。たいていの形質人類学者は大上段から「人種」をテーマにすることなどないし、口にするこすらなくなってきたのである。だが、前世紀の負の遺産のような類型学的な人種概念、つまりは人間を分けることだけを目的とした表象としての人種概念（かならずしも生物学的であり遺伝学的である概念ではないわけだが）を捨ててしまったか、というと、実はそうでもない。ある種の研究をめざす人類学者の思考様式の中枢には立派に生き続けているといえよう。たとえば、日本人の起源とか、日本人の歴史などのテーマで頭蓋骨計測や歯計測に血道をあげる研究者は、今なお少なからず存在しており、その多くの者の問題設定の前提に「日本人種」「アイヌ人種」「縄文人種」「渡来人種」などの人種概念が古色蒼然としたかたちで残る。それに、なぜだか知らないが「日本人」という存在が、その手のテーマが非常に好きなのだから、この傾向が弱まる気配はない。某テレビのプロジェクト番組など、「日本人はるかな旅」などと題して、昔、「縄文人（種）」がいて、そこに弥生時代、「渡来人（種）」が来て、「縄文人（種）」に置き換わり、さらに「縄文人（種）」から「アイヌ（人種）」や「沖縄人（種）」などが生まれた、などとやる（もちろん括弧内はテレビでは言われない、私の補足である）。

そうした形質人類学者の頭のなかは複雑である。言葉にはしないが、類型学的でレッテル貼りにも似た「人種」概念が依然として潜んでいるようだ。まるで幽霊を抱くごとくである。あくまでも彼らは、たとえば先史日本人などという生物集団の生成において、いくつかの類型論の文脈で区別できるグループ（すなわち、人種！）が関与したと念じてやまない。その点では、いくら詳細な頭蓋骨計測、歯計測、コンピュータ科学、DNA分析などの方法で近代科学の装いをこらそうとも、所詮は砂上の楼閣。いささかの観念論のくびきから逃れられない。なにぶん旧態依然たる



一九五〇年代以前の類型学的な「人種」区分を理論構成の枠組みとしてしているわけだから、中身は変わらないのに服装だけが替わったような日本人起源論となる。今なお、そうした形で亡霊のように生きる「人種」概念が、まさに「在来系縄文人」とか、「渡来系弥生人」とか、「渡来北方人」とか、「古代アイヌ」とか、「本州日本人」とか、ときに「琉球人」などではあるまいか。脳頭蓋形質や顔面頭蓋形質、あるいは生体計測値、さらには血液型多型性形質やDNA多型の出現頻度などによって、これらのグループは容易に区別できると、彼らはのたまうのだが、はたしてそうだろうか。平均値で論じる場合は、たしかにそうなることもあろうが。

ことほどさように、今や日本の生物学系人類学者とヨーロッパ諸国やアメリカの同業者とでは、Race概念に対する気持ちの持ち方がおおいに異なるようだ。後者では、ほとんど意味をなさなくなりつつあるのに、前者では今でも多数の者の頭のなかに残滓のようにある。ブレイス (Brace 2004) が指摘するように、欧米の人類学者には頭蓋計測学に対して不名誉な思いや嘲笑のようなものが芽生えてきて、そういう形の研究が非常に少なくなってきた。にもかかわらず、日本では依然として、その化石のごとき「人種」概念をいざきつつ、活発に研究を進め、なんらかの影響力を関係諸科学に向けて発揮する頭蓋計測学者が、けっして少なくなつたとはいえない。メディアなどで日本人起源論が紹介されるときは、まるで神様のようにふるまう。一番よい例が、頭蓋計測学に基づき古代人（たとえば縄文人）の身体形質を描くようなときである。彼らは自信をもつて、外耳の形、毛髪の性状、あごひげや体毛の様子、唇の厚さなどについて言及する。ときには、耳垢、皮膚色、ATL抗原やALDH欠損遺伝子の出現率についてさえも言及する。ちなみに、縄文人は福耳で波状毛が多く、あごひげや体毛が濃く唇は厚めで、湿型の耳垢が多く、ATL抗原やALDH欠損遺伝子を多く保有していたのだそうだ。そんなことが古人骨の分析で分かるのか？ もちろん分らない。怪しげなことを言い続けられれば、やがてそのつけは来ようが、まだそうなつてはいないわけだ。つまり、古人骨の頭蓋計測学などを進める研究者たちの頭のなかには、古い時代のパラダイムがあり、それこそが「人種」概念に基づくのではなからうか。

それと同時に、人種概念の問題を論じる際に、その背後にある一種のステレオタイプな言説に対して一言申してお

きたい。今なお、人間を分類するときの方便として、「モンゴロイド」「コーカソイド」「ネグロイド」などの用語を使う人類学の研究者は少なくない。実は私自身もその一人だが、私自身は人間を区別するためではなく、ヨーロッパ人が世界を席巻するようになる一六世紀以前の民族グループという意味あい使っているつもりである。別にこだわらるつもりはなく他の用語でもいいのだが、あとで述べるように、それらの用語に科学のルールである命名上の優先権が関係するからである。しかし、そうした言説では、まさにそれがゆえ、つまり「モンゴロイド」「コーカソイド」「ネグロイド」などの「oid」という用語を使うがゆえに、「人種主義者もどき」であるがごとく決めつけてはいまいか。たとえば竹沢(二〇〇三b:二五)は、「『コーカソイド』『ネグロイド』『モンゴロイド』といった人種分類が、二一世紀に入った今日も、日本社会では知の権威である教科書や事典に記述され、言説として再生産されつづけている」と述べる。これらの用語を使うこそ、まさに人種のリアリティを主張する前時代の人種論者のレリックだろう、ということである。

この手の意見こそ、まさに人種概念問題に対する過敏症とでも呼んだほうがよいのではなからうか。その理由は次のごとし。もちろんのこと、かつての人種学などうんぬんされていたような人種分類などする必要はない。ましてや、それが目的化していた人種学なるものまやかしについては言わずもがなである。しかし実際には生物人類学者は、ホモ・サピエンスの多様性の問題とか、各民族集団の歴史や先史を解明する問題にアプローチしようとする際、たんなる分析のための方便にすぎないのだが、いくつかの集団名を避けることはできない。あくまでも分析手段であるから、ときには実体性に抵触することもあろう。だから本当のところは名称など、どうでもよいのである。

言わずとしたヨハン・フリードリッヒ・ブルーメンバッハこそ、「モンゴロイド」「コーカソイド」「ネグロイド」などの発案者なのだが、それらによって人間の集団の優劣を問題にしようとか、人種的な偏見をおおろうとかの意図はなかった、と聞く。それどころか、ブルーメンバッハ自身は人間が連続的でありひとつながりに変異することを認識しつつ、あくまでも任意な区分として、それらの用語を発案したようだ(Blumenbach 1795; Brace 2003より引用)。そうだとすると、先に述べたようにブルーメンバッハの命名には科学のルールとしての優先権があることになる。い